

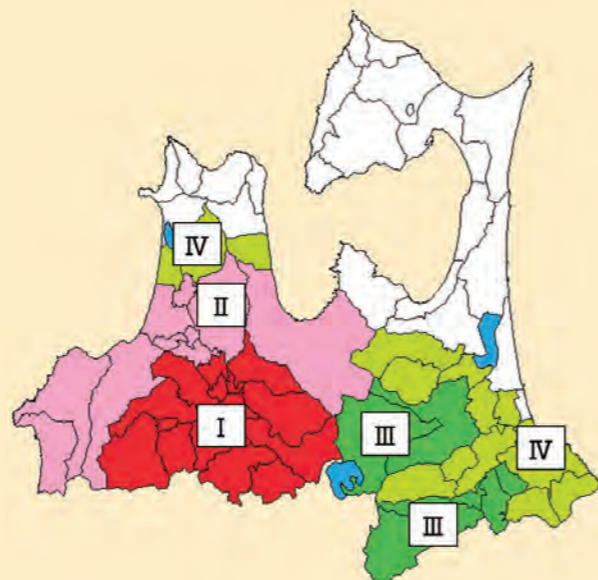
主な品種特性

項目	特性			
	評価	つがるロマン対比	まっしぐら対比	
初期生育	草丈	—	やや長い	やや短い
	葉色	—	やや薄い	やや濃い
耐倒伏性		「やや強」	1ランク強い	1ランク弱い
耐冷性		「強」	1ランク強い	1ランク強い
いもち病 抵抗性	葉いもち	「強」	1ランク強い	同等
	穂いもち	「極強」	3ランク強い	2ランク強い
穂発芽性		「極難」	発芽し難い	やや発芽し難い
収量性		—	同等～やや少ない	同等～やや少ない
玄米品質		—	同等	優る

栽培適地

栽培適地は稲作地帯区分
I～IVの地域となります。

- I 津軽中央地帯
- II 津軽西北地帯
- III 県南内陸地帯
- IV 県南中央・津軽半島中部地帯



生育目標

項目	目標値		
	地帯区分 I～II	地帯区分 III～IV	
m ² 当たり穂数	440本	410本	
籾数	1穂当たり	80粒	75粒
	m ² 当たり	35,000粒	30,000粒
登熟歩合	80%以上	80%以上	
玄米千粒重	22g以上	22g以上	
10a当たり収量	630kg	580kg	

問い合わせ先

青森県農林水産部農産園芸課稲作・畑作振興グループ
TEL：017-734-9480 FAX：017-734-8141

青森県産業技術センター 農林総合研究所 作物部
TEL：0172-52-4396 FAX：0172-40-4161

はれわたり 良食味・高品質栽培の要点 — 暫定版 —



令和4年3月
青森県

(地独) 青森県産業技術センター

1 種子予措・は種

- ① 浸種時の水温は10℃以下にならないように管理し、日平均水温の積算で100℃を確保する。
- ② 催芽は種粕の半分以上がハト胸状態になるまで確実に進行。

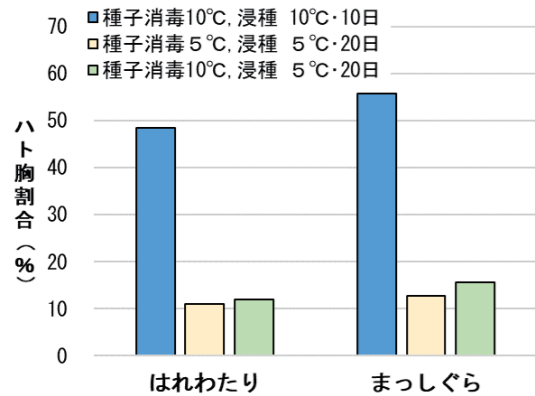


図1 種子消毒、浸種温度の違いによる催芽時のハト胸割合 [30℃、20時間催芽] (令和2～3年 青森農総研)

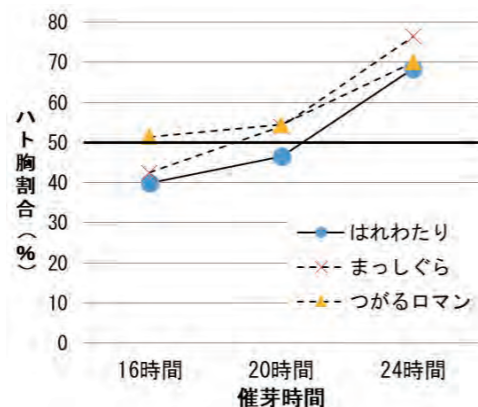
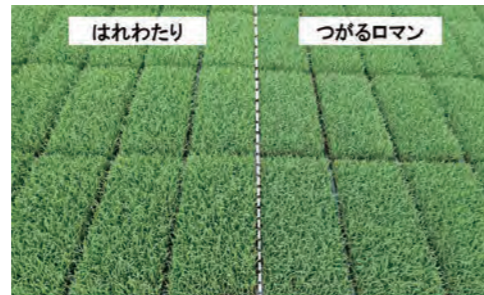


図2 催芽時間とハト胸割合 [種子消毒、浸種10℃10日間、30℃催芽] (令和元年 青森農総研)

2 育苗・田植え

- ① 機械的に毎日かん水せず、できるだけ節水して硬い苗を育てる。
- ② 育苗期の温度管理は適切に行う。
- ③ 適期田植えに努める。
- ④ 植付本数は、稚苗では4～5本、中苗では3～5本とする。
- ⑤ 植付深さは3cmとする。



4 水管理

- ① 生育ステージに合わせて、気象状況に応じた水管理を行う。
- ② 分けつ期に好天が続くようであれば積極的に浅水管理として分けつの発生を促し、茎数の確保に努める。
- ③ 幼穂形成期から10日間は、10cm程度の深水管理とする。
- ④ 出穂後、早期落水は行わない。

5 病害虫防除

- ① 種子消毒は必ず行う。
- ② 育苗期は苗立枯病の防除や適正な温度管理で健苗を育成する。
- ③ いもち病の基本防除は必ず行う。
- ④ 斑点米カメムシ類の防除は農薬の使用のほか、本田や畦畔などの雑草管理も含め、総合的に進行。

3 施肥管理 及び 生育・栄養診断基準

1 追肥体系

- ① 窒素総量(基肥+追肥)は下表の地帯別施肥基準量を参考にする。
- ② 基肥量は、穂肥1回体系は窒素総量の70～80%、穂肥2回体系は60%程度とする。
- ③ 追肥は、右表の栄養診断基準を参考に、穂肥1回体系では窒素総量の20～30%を幼穂形成期に、穂肥2回体系では窒素総量の40%程度を幼穂形成期と減数分裂期に半量ずつ分けて行う。

【栄養診断基準】

地帯区分	幼穂形成期の生育量	幼穂形成期の葉色値	追肥の対応	
			穂肥1回体系	穂肥2回体系
I 津軽中央 II 津軽西北	32,000以下	—	幼穂形成期に10a当たり窒素成分で2～3kgを追肥し、生育状況に応じて減数分裂期に1～2kgの追肥を行う。	
	32,000～41,000	40以下	幼穂形成期に追肥	幼形期と減分期に追肥
		41以上	葉色の低下後、減数分裂期までに減肥して追肥	
41,000以上	40以下	減数分裂期までに減肥して追肥		
		41以上	追肥を中止	
III 県南内陸 IV 県南中央 津軽半島中部	23,000以下	—	幼穂形成期に10a当たり窒素成分で2～3kgを追肥し、生育状況に応じて減数分裂期に1～2kgの追肥を行う。	
	23,000～33,000	40以下	幼穂形成期に追肥	幼形期と減分期に追肥
		41以上	葉色の低下後、減数分裂期までに減肥して追肥	
33,000以上	40以下	減数分裂期までに減肥して追肥		
		41以上	追肥を中止	

(注) 地帯区分ごとの追肥対応は、I～IIは黒石(沖積土・軽埴土)、III～IVは十和田(黒ボク土・埴壤土)の試験結果を参考とした

【地帯別施肥基準】(窒素成分量kg/10a、堆肥1t/10a施用の場合)

地帯区分	土壌の種類 土壌型	土壌の種類			
		湿田 泥炭・黒泥・強グライ	半湿田 グライ	乾田 灰褐色・黒色・黄褐色	砂質田 礫層・礫質
I 津軽中央	津軽中央	7～8	8～9	9～10	10～11
	山間冷涼	5～6	6～7	7～8	8～9
II 津軽西北		6～8	8～9	9～10	10～11
III 県南内陸	県南内陸	6～7	7～8	8～10	10
	山間冷涼 海岸冷涼	5～6	6～7	6～8	7～9
IV 津軽半島中部		6～8	7～8	8～10	10
IV 県南中央		6～7	7～8	8～10	10

2 全量基肥体系

(1) 被覆尿素複合肥料の全層施肥

- ① 使用する被覆尿素複合肥料は、緩効性の窒素成分としてLPS60日タイプが30%程度配合された肥料を使用する。ただし、LPS60日タイプで生育が劣る場合は、窒素成分の溶出が早い肥料(LPS40日タイプやLP70日タイプなど)を使用する。
- ② 窒素の利用率が高いため、施用量は追肥体系の窒素総量より5～10%の減肥を目安とする。

(2) 被覆肥料の育苗箱全量施肥

- ① 使用する被覆尿素専用肥料は60日タイプを使用する。ただし、60日タイプで生育が劣る場合は、100日タイプを使用する。
- ② 窒素の利用率が高いため、施用量は追肥体系の窒素総量より60日タイプでは25～30%、100日タイプでは15%の減肥を目安とする。

6 刈取り 及び 選別

- ① 刈取り時期は籾の黄化程度(ほ場全体の籾が90%程度黄化)を目安に、出穂後積算気温や籾水分等から総合的に判断する。
- ② 出穂後積算気温から刈取り適期を判断する場合は、970～1,300℃を目安とする。
- ③ 夏季高温年では刈取り時期が遅いほど胴割粒の発生が増加するので、刈取り適期内のできるだけ早い時期に刈取りを行う。
- ④ 粒厚選別機のふるい目は1.9mmを使用する。

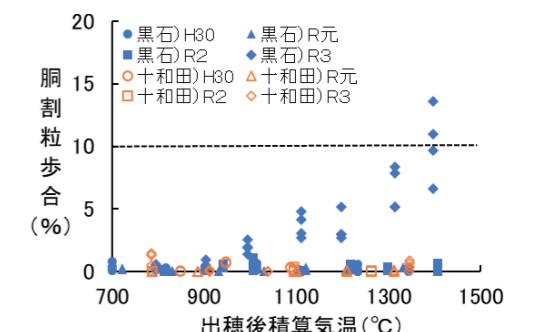


図3 出穂後積算気温と胴割粒歩合 (平成30～令和3年 青森農総研)